

インタビュー：復興の品格

関東大震災から考える市民・政治家・専門家の責任

名古屋大学減災連携研究センター 特任教授 武村雅之
(聞き手) 人と防災未来センター 主任研究員 高原耕平



2023年5月、高原耕平（編集委員/人と防災未来センター）、荒木裕子（編集委員/京都府立大学）、山崎真梨子（人と防災未来センター）が名古屋大学を訪れ、当時の被災者にとっての関東大震災をテーマに、関東大震災研究の第一人者である武村雅之氏からお話を伺った。当時を生き残った人々が残したものを、現代のわたしたちはどう受け止めることができるだろうか。

1. 関東大震災を受け止めなおす

——本日は被災者にとっての関東大震災というテーマでお話を伺いたいと思います。当時、東京や神奈川に住んでいた人々は震災をどのように体験したのか。また、住民や行政関係者や専門家は「復興」をどのように捉え、復興に関わっていたのかということに焦点を当てていただければと思います。

まず被害拡大の要点を押さえておくと、関東大震災の震源域は神奈川県から千葉県南部にかけて。でも被害の7割は東京市で起きています。それは大都市という人間がつくり出したものの問題が非常に大きい。江戸時代から災害はあるわけです。主な地震でいえば1703年の元禄地震があり、それから150年ぐらい後に安政の地震があり、それから70年たって関東地震ですね。

でも江戸時代の地震は関東大震災のような大規模な延焼が無かった。明治になってからの町づくりが決定的にまずかったんです。道路や公園の整備といったことを何もしないままに、本所や深川あたりでも明治から大正の地震までに5倍ぐらい人口が増えてるんですね。

——例えば大森博士や今村博士は水道管が壊れるので火災が

拡大すると警告していましたが、実際に当時の人々は災害の接近をリアルなものとして理解していたのでしょうか。

たぶん理解してなかった。それは今どきだって同じじゃないですか。人間って、そういうものなんです。すると、過去のことを知ってるかどうかというのがすごく重要だと私は思うんです。変な予測は無いほうがいい。全ての人間は予測が下手なから。被害想定というものも地震対策のためには必要かもしれないけれど、あんまり変な予測に頼らないほうがよくて。特に一つの予測だけに頼らずに、いろんなケースを知ってる必要がある。

——あの火災のなかを逃げ惑うっていうのはどういった体験だったのでしょうか。

東京の人たちはたぶんこんな地震が来るとは思いもよらなかったんです。映像などを見る限りは、火事が起こってもみんな眺めてるんです。で、いよいよ逃げようとなった時に、思い思いに家財道具を出した。



でも、密集してくると、みんなそれ以上進めなくなって、全部置いていっちゃう。そうすると結局、道路という道路に家財道具が埋まるわけですね。その家財道具が燃えるから、道路が防火帯として機能しない。

2. 関東大震災と帝都・東京

——当時の人々にとって、そもそも「復興」はどのような体験であったのでしょうか。

帝都復興事業が行われたのは東京と横浜だけなんですけれど、事業の規模から言うとほとんど東京の復興の話なんです。

まず、その東京と横浜に入らない地方の復興は、どうやったのか。神奈川県では耕地整理法を適用して農地や水路を復旧しています。県が指導して約半分は補助が出ますが、もう半分は地主さん達が負担している。平均して地主 1 人当たり、今のお金換算で 200-300 万円ぐらいのオーダーです。

神社仏閣の復興も、国からはほとんど補助は出なくて、氏子さんたちが今のお金換算で 20-30 万円ずつ出し合っている。神社の復興は非常に早くて、みんな協力するときの精神的支柱だったんでしょうね。

——東京市ではどうだったのでしょうか。

東京市民が復興事業に対してどうだったか。区画整理をやるわけですが、これは当然、住民は反対します。ただ、それに対して東京市の永田秀次郎市長、建築局長の佐野利器といった人たちが一生懸命、説得するんです。区画整理というのは政府に言われてやるようなものじゃないんだ、市民がやらなきゃいけないものなんだ、と。合い言葉としては「復興にまさる供養なし」ということを盛んに言う。それで結果的には、やっぱり東京市民も、そこまで言うんだったらしょうがねえかという方向に動いていったんです。

当時の東京市民は、東京市役所や永田秀次郎に対して非常に信頼感を持ってたように思います。市がどう

いう行政をやるかということにも、意外とある程度の理解はしていた。つまり市民と行政との間がかなり近かったような印象は持ちますね。僕らが今の都庁に対して何やってるのかよく分からないみたいに思ってるのとは、だいぶ違った雰囲気があったような気がする。

復興局にも汚職はあったんです。だけど最初に立てた目標がよかった。市民も復興局に対して相当に批判はするけれど、トップの人がそれだけ自分たちのことを思ってやってくれてるんだから、何とか実現させたいということもかなりあった。今回のオリンピックみたいに湾岸の不良債権をなくすために、あんなところにタワーマンションをいっぱい建てるというような、そういう目標とはかなり違ってる。

——復興事業の理念が共有されていたということですね。

帝都復興事業には 3 つの大きな原則があるんです。1 つは公共的だということ。一個人や一つの会社がもうかるようなことは絶対駄目で、復興事業は市民のためにある。それが今のオリンピックや開発と全く違うところなんです。今の開発は誰かがもうかりさえすれば、それでトータルがもうかって経済成長するからいい、あとは勝手にそのおこぼれでみんなが豊かになるという仕組みでやってるけれど、それは駄目だと天皇の詔書にも書いてある。

2 つ目は国民の合意をきちっと得るということ。さっき説明したように一生懸命、合意を得ようとした。今は合意というよりは、みんなよく分からないけど勝手に進んでてこうなっちゃったというようなやり方ですが、それとはかなり違うでしょう。

3 つ目は一番大事なことで、首都としての品格を持った街にしたい。「品格」というものは別に何の得にもならないんだけど、でも考えると結構大事なことだと思います。やっぱり品格があるから、みんなが好きになる。どうも今の東京などを見ていると、もう品格なんて全くなくて、とにかく金になることだったら何でもありみたいな感じ、合法であれば何でもありみ

たいな感じなんだけど、それは違うんですよね。

その3つが帝都復興事業の根幹としてあったんです。いまも見習うべきだなと思います。

——神奈川の地主さんたちが耕地整理を負担したとか、氏子さんたちが神社の再建を担ったというのも基本は似ていて、シチズンシップのようなものがあったのかなと。

うん。そうですね。そういう部分はあったんでしょうね。自分たちは自分たちで社会のコミュニティーに対して、それなりの責任を持つてるとするのは庶民のレベルまであったんだと思うんですよ。

区画整理の対象になった貧しい人たちのために作ったのが同潤会アパートですけども、建設費は税金から出してない。義援金から出してる。誰かが得して誰かが得しないということは極力避けたいというのがあったみたいで、その辺は今と相当違いますよね。

全てが効率性優先になってしまうと、貧富の差がものすごく出てくる。それはそれで社会不安も含めて、みんなが幸福になるわけじゃないので、やっぱり、そこに公共という概念をきちっと入れてバランスを取らないといけない。今の社会はそれが崩れてるんじゃないかという気がしてしょうがない。だから、たぶん帝都復興事業でできた東京に対しては、みんな、す



写真：今も活躍する復興小学校（武村氏提供）

ごく誇りを持ってたと思うんですよね。

——元になるシチズンシップみたいなのが無いとできないのではないですか。それとも、そうした事業をするからシチズンシップができていくのか、どっちなのでしょう？

行政の考え方にもよるでしょうね。大きい政府、小さい政府、どっちを選ぶかという話もありますが、やっぱり何か一本筋が通ってることが政治家に必要なような気がします。ここから先は譲れないといったものが。社会のリーダーたる人の資質がかなり大きいんじゃないかな。

そういう意味では、東京の特に都心部は復興の時点で本当に素晴らしい街になったと思いますね。帝都復興事業が行われた。区画整理ももちろん道路、それから橋梁、学校の建物、そういうものは全部、空襲もくぐり抜けてるので。ただ、残念ながら東京はそのあと全然駄目だった。東京は昭和7年に今の23区に広がるんだけど、全然、何もしなかった。戦後も。あんなにしなかった町というのは他にない。

だから町づくりということをもうちょっと真剣に考えないと駄目なんじゃないか。日本の防災対策は個々の建物を燃えないようにとか、耐震にしようとはしてるけれど、道路を広げるといった街全体としての防災対策は全く抜けている。これからは、そういう問題だと思います。

近年の容積率の緩和などは言語道断ですよ。東京の丸の内に行ったら、ビルがぎっちり建ってる。あれでもものすごく人口が増えて、あそこに通勤している人が大勢いる。そういう人たちにとったら一銭のメリットもないのに毎日過酷な通勤にさらされなきゃいけない。あれは容積率を売り買いして関係ない人がもうかってるだけでしょう。勤めてる人は地震が起こったら帰宅困難者になるし、エレベーターに閉じ込められたら死ぬかもしれないんですよ。だから今の町づくりは不公平なんですよ。

——区画整理して道広くなってよくなったというのはあるんですけど、東京という町全体で見たら本当にレジリエンスが上がってるのかといたら、たぶんそうではなくて。震災でやられて戦災でやられたのに、なぜさらに脆弱な街をつくって、みんなそこに住みたがるというのは何なんだろうと疑問に思います。

うん。分からない。私もよく分からない。世界のビジネスセンターの一角になりたいと今よく言いますよね。問題は金もうかるということに対して、みんな、なかなか異論を唱えにくい社会的風土になっちゃってることです。防災なんて絶対に忘れ去られるに決まってる。だから防災や建築やってる人間がもっと言わなきゃいけないんですよ。

——金もうけになるよと言って大きなの建てても1回カシャっとしたらそれが全部パーになってしまうわけで、ほんまに金もうけになりますかという。

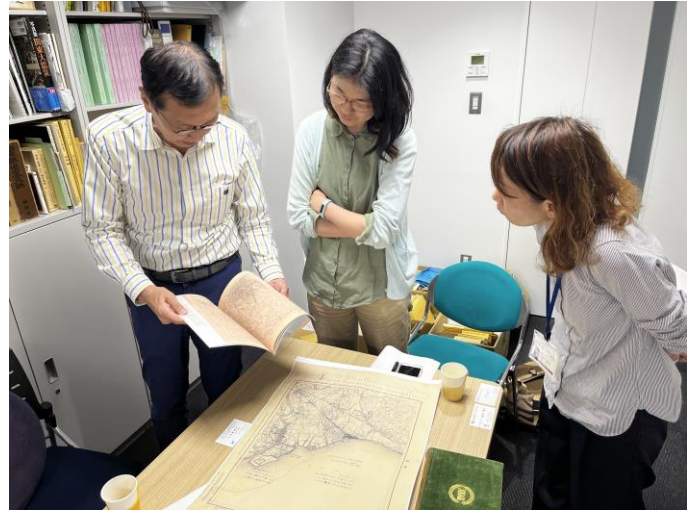
だって誰もそんなもの来ない、来るまでもうければいいと思ってる。建ててる人は何も先のこと考えてない、今もうかれればいいんだから。タワーマンションなんて、100年たったら全部廃墟ですよ。

4. 後藤新平と井上準之助

——リーダーシップという点に関しては、後藤新平の評価をどう考えるべきでしょうか。

後藤新平という人はたぶん政治家としては三流ぐらいだったと思います。ものすごく強引な人、つくらなくてもいい敵をバンバンつくる人なので。

当時の日本の国家財政を悪くしたのは後藤新平もかなり片棒を担いでいる気がしています。原敬と高橋是清が景気回復のため財政出動してばらばらお金を配って、国家予算が15億円くらいの時代に国債残高が50億円くらいになっていた。後藤新平は寺内内閣で外務大臣をやるんですが、シベリア出兵でも膨



大な借金が残った。

そういうことがあってかなりの借金を抱えてたんですが、後藤新平という人は全然、意に介してない。それで震災後に帝都復興院をつくって省庁横断的に復興しようとするわけですが、彼が立てた計画が最初に言ってた30億とか40億とかというのは、もう全然、現実味のない話をぶち上げて、さすがに帝都復興院は一応15億円の計画を提案するんですね。それがだいたい東京市15区全域復興しよう、焼け跡だけじゃなくて、そうじゃないところも含めてというわけですね。

当時大蔵大臣だった井上準之助が財政の健全化を考えて、国債の利回りが5%ぐらいだったので国家予算で利息が払い続けられる規模を考えると15億円が復興事業の国債発行額の限界だと考えた。

でも実は、この15億円のうち、道路や建物や省庁の施設を復旧させるのに6億円がかかる。さらに、地震だから火災保険が下りなくて保険会社に批判が集まった。見舞金だけでも出せということになったんだけど、それでも膨大な額なので政府が保険会社に貸し付ける。これが2億円。残りの7億円が帝都復興事業に使えるというお金になった。「反対派に削られた都市計画」というイメージでよく言われるんだけど、そうじゃなくて日本ができる限り、ぎりぎりのことはやったというふうに思ったほうがよくて。それで結果

的に事業範囲が焼け跡だけになったんですね。

後藤新平は予算が削られた時点で投げ出しちゃったから、最初に打ち上げ花火をただけなんです。しかも全然調整しないんです。例えば後藤は復興院ができる前に、政財界の要人を集めて帝都復興審議会というのをつくるんですね。でも彼は何も根回ししないんです。少なくとも帝都復興院をつくる時に一応こんなをつくるからって言えばよかったんだけど、全くその審議会に諮らないままつくってしまう。いやあ、後藤に任せてるとまずいよな、とみんな思うわけです。

ただ、井上準之助は「やっぱり後藤さんがいたからできたんだ」と。最初に後藤がああいうことを言い出さなかったら誰もできなかったということは、すごく言っていますね。それももともとです。井上は後藤が言ってることをなんとか実現させなくちゃというふうに思ってたみたいです。

その後、山本内閣も倒れ、後藤が亡くなった後も復興事業はずっと続いて成り立っていったんですけど、そういう意味で後藤新平だけに焦点が当たってるのは何か間違ってるような気がしますね。

5. 過去の遺産の上に何を残してゆくか

——最後に、当時のひとびとが為したこと・残したことに対して、いまのわたしたちは何をしてゆくべきでしょうか。100年前の災害を伝えてゆくことの難しさを感じるのですが……

生涯かけても研究し尽くせないぐらい当時の資料が残ってるんですよ。だけど、それを知らずとしない。それが問題なんです。資料が残っていれば、われわれみたいな研究者によって、世の中にいつでも事実を伝えられる。

だから、われわれは少なくとも、いま起こった災害については、その事象をきちんと調査し残すということをやすべきです。特に直後に急いでやらないと駄目ですよ。自分の手柄話はそれからです。直後の10年間ぐらいがもう絶対的で、その時期にやらないと、本当かうそか分からないことばかり残っちゃう。や



っぱり僕らみたいに災害に係わってる人間、ないしは研究者も含めて、そういう人たちの責任が非常に重い。

関東大震災では震災予防調査会が報告書を6冊出していますけれど、研究者の手柄話は1つも無い。全部、資料です。予算が厳しかったけれど、今村明恒がなんとかお金を集めて出版に至ったんですね。その資料があるから今研究ができる。

僕は30年間研究してきましたが、前半の15年は一生懸命、昔の記録などを使って解析やったり、震度分布をつくったりしていました。後半は自分でも何か残せないかなという気がして、それで石碑を調べ始めたんです。最初は慰霊碑しか頭になかったけれど、調べていくと復興碑も結構あって。

実はね、そんなに言うほど大変じゃないんですよ。僕は自動車に乗れないから全部、公共交通機関で回りまわりましたが、回れるんですよ。神奈川県はほぼ全域、それから東京では23区内は全部調べた。

東日本大震災の時に石巻日赤病院の先生が名古屋大学へ来て講演して、けが人を連れてきた人が、もう家がないから帰る場所がないと言うので困ったんですと話されましたが、関東大震災のときと全く一緒だと思いましたね。その日赤の先生も関東大震災の時の日赤の報告書を読んだらあんなに戸惑うことはなかったと思いました。

そういうことを含めれば、関東地震についてはまだまだ僕が見てないものは膨大にあります。各機関が出してる報告書なんて全部もちろん見てないから。そこまできなくてもね、発掘されていないものは災害ごとに結構あるような気がする。ぜひ、そういうのを見てください。ちょっとでもいいので。僕はそれが後世に伝えるべき一番重要なことのように思えてしょうがないんです。

やっぱり今の僕らは過去の遺産の上に生きてるわけだから、自分たちもその上にまた何を残していくかと考えたほうがいい。災害が起こった時に、できるだけ忠実に事実を書き記して残すというやり方もいいでしょうし。自分が経験した災害と、昔のものもちゃんと調べて比較するという仕方でもいい。比較してみると、意外に共通してるんだよね。うん。人間が絡んでるから。

参考文献

- 1) 武村雅之(2023), 関東大震災がつくった東京・首都直下地震へどう備えるか, 中公選書.
- 2) 武村雅之(2017), 復興百年誌-石碑が語る関東大震災, 鹿島出版会.
- 3) 武村雅之(2008), 天災日記-鹿島龍蔵と関東大震災, 鹿島出版会.
- 4) 武村雅之・都築充雄・虎谷健司(2013-2015), 神奈川県における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その1 県中部編)(その2 県西部編)(その3 県東部編), 科研費 JSPS KAKENHI 25350496
- 5) 武村雅之(2019-2021), 東京都における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構(その1 墨田区・江東区)(その2 台東区・荒川区・中央区・港区・千代田区・文京区)(その

3 郊外各区と移転寺院), 名古屋大学減災連携研究センター(研究報告書)